

1月16日 逍



幕末に完成した照國神社も、その後ずっと安泰だった訳ではなく、西南戦争時に社殿と宝殿が焼失。改築後の昭和20年8月には太平洋戦争の戦災で再び焼失。その後、段階的に再建されたのだそう。因みに、照國神社入口に立つ「大鳥居」の高さ(約20m)は、昨年(2023)の春147年ぶりに復元された「御楼門」とほぼ同じ高さだそうで、今後は、この2つの「高さ」が、ここ城山ゾーンの歴史ストーリーを語り継ぐシンボルとなるかもしれませんね。

ところで、逍遙館長さんの話しでは、この2つの「高さ」にはもう一つ共通する人間の歴史の証言が遺されているようで、それは「弾痕」。御楼門周辺の石垣に遺る、西南戦争時の多数の弾痕は衆知のとおり。そして実は、照國神社の大鳥居にも、横に走る貫(ヌキ)の左端裏側に、小さな黒い傷が1つ見えるそうです。これは、太平洋戦争中の航空機の機銃跡を、敢えて一箇所だけ戦争の記憶として残したもののなのだとか。(尤も、背の低い猫のワタシには、さすがにその「高さ」まで見上げるのは無理なのですが…)

次回「教育? それとも 人材育成? 、のこころ」

2つの「高さ」が
語り継ぐもの、
のこころ

